ごあいさつ

江﨑 信芳
えさき のぶよし

京都大学 理事・副学長

みなさん、こんにちは。今日は大変お寒い中、お集まりいただきありがとうございました。京都大学を代表しまして一言ごあいさつ申し上げます。

フィールド科学という言葉、なじみがおありかどうか分かりませんが、京都大学を特徴付ける学術分野でして、京都大学にとって非常に大切な組織の一つとなっておりますフィールド科学教育研究センターが主催し、力を入れておりますのが「時計台対話集会」です。年一回開催しておりますが、今回六回目を迎えました。今回も多くの方々のご協力をいただいており、本当にありがたいことと感謝申し上げます。

今日のテーマは「木」ということです。私もよく存じなかったのですが、日本の国土の三分の二が森林だということで、先進国の中では日本は際だった森林王国ということです。この日本の森林のおよそ四割が人工林ということになっておりまして、そのため本来森が持っている豊かな包容力というのですか、そういったものが十分に発揮されずに、たとえば土砂災害が起こるというようないろんな問題を抱えています。

また、日本はこんなに森林資源が豊かなのですが、一方では、日本で使われている木材のおよそ八割が輸入材だと。

つまり、海外から持ってくるわけですが、それらの木がまっとうに伐られたものかどうか。聞くところによりますと、環境にとっては好ましくないやり方で伐られたものも流入しているとか。そういった木が輸入されていたりすると、知らず知らずのうちに、日本が環境破壊の片棒を担いでいたりするわけで、そういう意味で、非常に矛盾に満ちた国だという言い方をすることもできるわけです。

森というのは川を通って、里そして海につながっているわけですけれども、森の環境が、里や海の環境の源泉になっています。森を豊かにすることがすなわち、里や海を豊かにすることにつながるわけです。そういった連環があるわけで、それを学術として研究することは非常に大事です。それとともに市民の方々も今一度思いをあらたにしていただき、森の大切さや「木の文化」の大切さに気づいていただくことが大事ではないかと思います。

「森里海連環学」はフィールド科学教育研究センターが提唱する学問として六年が経とうとしていますが、大きく発展しておりまして、これもひとえに関係者の皆さんのご努力の賜でして、非常にありがたいことだと思っております。本日の講演等を通しまして、各分野でさらに議論を深めていただければと願っております。以上簡単ですがごあいさつのことばとさせていただきます。